研究

寺の四季

―福泉寺の年中行事―

畑の浦史談会長　富澤　豊

茲に一冊の古文書がある。それは畑の浦の禪寺福泉寺の年中行事の記録である。年代は記されてないが、調査の結果、江戸時代も末に近い文化年代（一八〇四―一八一八）のものである。

この寺は、毛利高政公が慶長年間佐伯に封禄され、養賢寺を創建した後、従来　福庵と呼ばれていたものが、養賢寺の蠻嶽和尚を開山として、臨済宗妙心寺派に属し、福泉寺となったものである。此の地方では一、福泉寺、二、東光寺（菊江）、三に柏江（堅田）の江国寺と、古くとなえられて寺風が盛んだった。その背景は入津四浦（旧上下八浦）大庄屋制度の上にあって、極く一部の浄土真宗門徒を除く殆んどの部落民の信仰が集っていたこと、数十町歩以上の雑木林（木炭原木林）、二町歩余りの田畑が寺領として毛利藩より寄進があったことが、また大きな支えであった。尚地元畑の浦が大庄屋制度下で、徳川三百年間入津湾内外の漁業権を、独占的に近く掌握した富の蓄積が、寺の維持にも関係があったと思われる。それは現在残されている福泉寺周辺の五輪塔群、庚申塔、あるいは地蔵尊寺の巨大さからも、往時が偲ばれる。

福泉寺の現在の伽藍、寺屋敷の外形も、元禄期には既に完成されたものである。僧侶は常に十名を越えたというが、一つの道場として、禪堂の格に近いものがあったのであろう。

その寺の年中行事が、月を逐って誌されているが、この中で、対役所―藩庁―対四浦の公的なものだけを抜萃し、寺内行事は出来るだけ省略する。

（注）四浦とは、畑の浦（長浦を含む）、櫛水、竹野浦河内、西野浦。

年中行事

一　月

一　元旦丑之下刻大鐘百八声　洗面　葦敷天前ニ而焼餅茶禮（以下読経行事略）当浦年詞来ル　酒ヲ出事

この文中の葦敷天とは非常に足が速く、速かに鬼を退治するので、仏法の守護神とされている。従って速く走ることの形容とされ、葦敷天走りの諺がある。

夜半を期して今も撞き鳴らす大鐘の音は、諸行無常の音ならず、新らしい年への願望、決意としてひびいてくる。

鎮守伊勢水神社（祭神　神武天皇）への初詣、福泉寺の大般若経典の祈祷会、清水庵幸福の願いは今も変らず、益々盛んとなる元朝の風景である。

一　二日　行事引続　般若如元日　今日三ヶ浦年詞来ル　酒肴前夜ヨリ澤山用意之事　惣霊具

一　三日　如前日　住持城下行　伴僧僕二人　山越えの木立峠の大坂は、人々皆あらじぼき

一　四日　登城　家中年詞　済次第帰寺之事

一　七日　当浦年詞　先觸頭百姓老人頼事　供廻り前夜ニ支度致置事

一　六日　西之浦年詞

一　七日　竹野浦河内

一　八日　櫛水浦

年詞廻りは、先触れを先頭に「福泉寺年頭」と大声で呼び

つつ、住持を中に供廻りが大傘を捧げて浦々を廻る行事であって、畑の浦では、大正の初めまで続いた。

一 九日 時分 天気能ク見合 扇嶺ノ火道ヲキル事 人歩古禮アリ 貳拾四五人宛 伊セ吉嘉平エ前日申渡事 藥石 豆飯 汁ケンチヤン

藥石とは夕飯のことで、作業人歩(人夫)のねぎらいの食事の手配である。尚朝食を粥座(しゅくざ)、昼食を斎座(さいざ)といって、文中によく記されている。

扇嶺は扇山といわれ、五十六町歩、現在大分県との契約造林が結ばれ、薪炭林から針葉樹林と変わり、将来は寺経営上の大きな財源となるであろう。

一 三ヶ日献立

寺内僧侶の献立は省略するが、「四ノ浦一同肴献立 并したし井大根青こんぶ」盛り替へる様にとの注意書

一 十五日 後 四浦廻り 般若 当番之浦エ申遣事 般若室札前日ニ用意之事

元日、二日、三日の大般若祈祷会の室札(おふだ)さ、浦の当番の家に配る。畑の浦では現在、正月五日のお日待の部落行事の席上、各戸に配られている。そのお札は次のようである。

天下泰平 五穀豊登
奉轉読大般若経 全函 龍興山 福泉禅寺
福寿延長 諸願吉利

二 月

一 八日 前船之書出並宗門帳 寺社方ヘ納メ是ハ納所(なっしょ)ヲ遣事 宗門銭三文 月番之寺社エ出事

一 十二日 四浦役人印形ヲ受ニ午日前ニ来 豆腐走箱酒走升 役人持参 寺ヨリ肴三四ツ用意之事 茶積ヲ出

一 十三日十四日両日之内宗門帳ヲ認メ當番之寺社方エ可納事

キリシタン弾圧の手段としてとった宗門改めのための事前事務を担当した寺の役目の一つであるが、文中四浦役人とあるが、庄屋・地目附・頭百姓・船宿が浦役人として記述されているのが楠木浦庄屋文書(天保三年)にある。大庄屋はそれらの上にある役名である。

一 彼岸後 胡瓜カボチヤ白瓜 諸ノ種物マクワ忘レルワ

ナカレ

下旬ニ里芋生姜(しょうが)種(うう)ルワ

菩提和讃の一節に「春はよろづの種を蒔き」とあるが、多くの雲水・小僧等の野菜の自給自足、更に役向で集る人、法会等に参拝する入津四浦の人の事を考えると、農作務は寺の重要な行事だったに違いない。

三 月

一 (養賢寺関係の記述あるも略す)

一 当月之内ニ モズク 白モ等ヲ取リニ行事

海草も野菜として、天然資源として確保されていた。

一 廿一日 弘法大師 浜村田中鍛治屋敷ヨリ接待アリ

浜村は当浦の小部落名であるが、この大師信仰は現在益々盛んで、寺の裏山を巡って祀られている四国八十八か所は、お大師講の人々、無論部落の人々によって護持され、廿一日は奇特な人達より豆飯のお握り、草餅の接待があり、素朴な姿の信仰が続いている。「庶民の中にあるお大師信仰」の根強さ。

一 下旬ニ見合 茶摘ノワ

福泉寺山門前に参道にそっての茶畑が、今も名残りを留めている。

四 月

一 三日 早天内外掃除 是ハ楠元尾浦改ノ次参詣アル故

二

一 三日 当所御改 大概昼時分来ル 御役人着ヲ聞合セ住持大絡子(だいらくす)(法衣の一種)着袴(はっか)(足袋)僧伴供走人ニ

而大庄屋ニ行ㄱ　会合之上直ニ帰寺
暮方ニ改行人ニ員寺エ来ル　酒肴用意之事

一　今夕寺社奉行衆エ酒二升程出　次ニ住持見舞ニ出ルㄱ
キリシタン弾圧のための制度、お改めの行事を、富高唯一さん（史談会員）は、古老よりの聞き伝えと私に語る。
「御維新前の八津は、千軒に近い戸数、その家長全員が、大庄屋の浜に一堂に集っていた。その数は数千に近い。一家揃っての宗門改めに、親子の呼び合う声はかまびすしいものがあり、城下より物売り屋も来て市が立った。このお改めを受けない者はいわゆる無宿者となるのである。
その頃の浦の人々は、麦秋前の旧四月は、貧農には飯麦の貯えがないので、貯えのあるものから『改め麦』といって借り、臼でついて素麦（すむぎ―米の全くはいらぬ麦だけ）で食べていた。」
という。哀れな話である。
何れにしても、宗門改めは大変な行事で、「宗門、寺は福泉寺、」とその席上での返事を、合言葉のようにくり返していて、それが明治末期まで続いていたようである。

一　八日　誕生日　前日華堂　諸方掃除ノㄱ　甘茶ヲ前日ニ煎置ㄱ
釈尊の降誕会は、昔も今も甘茶がつきもので「天上天下唯我独尊」の誕生仏を華で飾った御堂にまつる記事である。

五　月

一　入梅前　茄子　胡麻　栗　ウエルㄱ

一　十五日　養賢寺祈祷願若　申之刻（午後四時）迄出頭
この際、養賢剣山にお供え、また寺への暑中見舞にうどん粉などの記入あり、寺社奉行方へ酒料を届ける習慣が書かれてある。

六　月

一　土用中ニ醤油仕込　味噌漉　時見合ニヨツテ致置ㄱ
直教天気之節　書物　衣類等土用虫之事
醤油、味噌の自給も、寺の作業の一つ

七　月
この月は盆とひかえて、寺の内外の掃除作業が、厳重にこく明に記されている

一　十二日（前暑）
西ノ浦　竹野浦盆礼ニ来　見合茶積ヲ出ㄱ
平　けんちやん　大衆を同前
四浦が一回では混雑するので、盆礼の日割を調整している。

一　十四日　諸方大掃除　魚鱗供養役元エ申遣ㄱ　役元ヨリ三ケ浦エハ案内ノㄱ
（中暑）当所エ分テ棚経ニ行ㄱ　法軒モ不残手等ニ歩クㄱ　主席留主番　可慎

一　十四日　十五日両日　墓所読経之事
両日の夕方は檀徒も家中打揃って、先祖の墓参は今も昔も同じだが、たそがれ迄、多くの僧等によって寺の周辺の墓地も、鈴（れい）を鳴らして歩く読経の声が耳朶を打つようで懐古の情が深い。

一　十六日　四ノ浦　網方（仲買人）小賀　揃次第　魚鱗供養ヲ始ル
厳重な秘調の高式がはじめられる。魚鱗供養は魚貝類の殺生に対し、その供養をする行事で、福泉寺では昭和四十五年の供養塔が最近のものである。
山門の前に明和年代（一七六四）の建立になる魚鱗供養塔「江海魚鱗離苦得楽」が現存、羽柴先生の
日だまりや魚鱗をまつる塔のあり
の句がある。
入津の人達は太古から魚漁で生活した部族があつた事実、寺の谷月塚（福泉寺の付近）でも想像出来る。後代に盛大な供養行事のために、物心両面から意を配った話事を抜き書すると、十三日に料理人二人を城下に買物に出し、十四日から当浦役元は三ケ浦を巡回し、十五日に給仕子の手配等細心の注意を払っている。
買物控によると、酒七樽代金五拾目、米四斗三十六文等々細々とあるが、寺の行事の中でも宗門改、十二月の臘

八会（ろうはちえ－釈尊成道の日十二月八日の行事）と共に、寺の三大行事だといえよう。

エコノミックアニマル化した現代人、漁場の荒廃、公害等、言われている漁民も、心すべきは魚鱗供養の心への反省である。

（七月・八月 省略）

十月

一 二番醤油仕込事

食べ物に対する及ぶ限りの細心の心くばりがここにもある。むべなるかな。先住寛洲和尚は、自家用醤油の醸造技術については優れた腕の持主でまたよい指導者でもあった。

十一月

一 四日 内外掃除 入浴 今晩伊勢本祭り

一 五日 朝課 引続 茶湯 葉歌天前 樗厳光、消災光 諷経

粉後主帯参詣之事

今伊勢本神社の大祭は、四月三日・四日に催されている。

一 十七日 内外大掃除 剃髪 入浴 秋葉前（注 秋葉大権神前）

御鏡弐ツ重三外掛キ 生霊供之事

秋葉祭りとは何か。今日では当浦でも詳解に乏しいかも知れないが、今でも毎年正月のお日待の日に

「奉祈念 秋葉三尺坊守護所」

という、火伏せの祈願札が、当番の座で配られている。

そもそもは享保年間（今から二六〇年程前）、当地富高氏（富高辰平治氏先祖）が故あって遠州（静岡県）秋葉大権現の分神を勧請し、その後福泉寺に移され、その御神体は寺内観音堂に祀られている。

御神体は天狗様で、白狐を従えている。この秋葉大権現は火伏せの神「火之迦具土神」で、東海道地方を中心に信仰が広がり、かつては全国に三万八講を持っていたといわれている。当浦も寺を中心に多くの信仰者が出来、秋葉講を設け、十七日の祭の日には、数十名の参詣客の名前が誌るされている。

尚、特に案内すべき講員四十八名の名前が書かれ、次の献立が書かれてある。

硯蓋（九年方・椎茸・山芋・牛蒡・石焼豆腐）

丼 皿（七ツ物見合セ） 皿（酢和会・大根）

汁（ごじる） 坪（のっぺい） めし 平（揚豆腐）

茶わん（人参・うすふ・芋・椎茸 青味）

などで、なかなかの精進料理である。

現在では富高家を中心にその名残りが続けられ「秋葉山」の小祠、天保年間からまつり続けられている立幟によって講の人達十余人がおまいりしている。

十二月

一 朝日 臘八接心入（八日まで 座禅・説法等の行がつづき）

一 八日 大鐘を合図に当浦禅本浦の一同参集、本堂で接心会執行、これらの行事は今日殆んど昔のまま行なわれているという。

一 節分 豆ヲ升ニ入レ、祝儀老多 扇子表対幣ニノセ、葉歌天ノ前ニ可置 僕 鬼ハ里 福ハ入 ト諸堂ニテ豆マキ了テ茶礼之事 今晩放参。

一 廿五日 早朝粮米ヲカシ支度可致事 六ツ時分ヨリ掛ツキ掛リ 諸堂ノ鏡餅ハ 本尊エ弐重 左右エ三重 裏仏祖地蔵尊エ弐重 亡僧エ小五重 観音堂エ四重 葉歌天三重 福網代観音エ三重 法衣餅大弐重 其外小十重

点心

平 豆腐 里芋 大根 白酢

牛房 青味

終りに、かつては入津四浦（畑・加茂・椿本浦・河内・西野浦）の福泉寺も、歴史の流れの中でかなり変っているが、うれしいことに、この年中行事に見る限り、寺の伝統はこのまゝ受けつがれて今日に至っている。

以上、何かの参考になれば幸いである。

（おわり）